

氏名	PIERCE, Nathan J (ピアース, ネーサン J)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第208号
学位授与年月日	2018年6月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	The Psychological Mechanism of Self-Evaluation Maintenance and Relationship Maintenance in Adolescents 青年期における自己評価維持と関係性維持の心理機制
論文審査委員	主査 教授 磯崎 三喜年 副査 教授 森島 泰則 副査 上級准教授 西村 馨

---

## 論文内容の要旨

本研究は、対人関係に潜む力動性を特徴とする自己評価維持 (Self-Evaluation Maintenance: SEM) モデル (Tesser, 1988) および、それを修正した自己評価と関係性維持 (Self-Evaluation and Relationship Maintenance: SERM) モデル (磯崎, 2012) を、質問紙法により実証的に検討したものである。SEMモデルは、対人関係における自己評価維持を、次の二つの相反する過程から説明している。一つは、比較過程であり、自己にとって心理的に近い他者 (友人) の優れた達成によって、自己評価が低下する過程を指す。他の一つは、反映過程であり、逆に友人の優れた達成によって、自己評価が上昇する過程を指す。この二つの過程のいずれが生起するかを規定するのが、自己にとっての関与度である。関与度が低いと、友人の優れた達成は、自己にとって心地よいものとなり、自己評価が上昇する。しかし、関与度が高いと、友人の優れた達成は、自己にとって脅威となり、自己評価が低下する。こうしたSEM機制は、小・中学生、大学生の友人関係では、研究が蓄積されている。しかし、高校生のデータは、いまだ不十分である。また、これまでの研究で、SEMモデルに必ずしも合致しないデータもあり、新たなモデルとしてSERMモデルが提唱されている。本研究は、このSERMモデルの実証を試みたものである。

参加者は、日本の高校生416人とシンガポールの高校生300人であった。参加者は、自己にとって関与度の高いまたは低いさまざまな領域について、自己、親友、および第2の親友の能力や達成度を7

段階尺度で評価するよう求められた。その結果、日本およびシンガポールいずれにおいても、フリータイムの活動やクラブ活動などにおいて、関与度の高低と心理的近さとの間にSEMモデルから予測される交互作用が見出され、SEMモデルの基本的な妥当性が確認された。

さらに、日本、シンガポールいずれにおいても、SERMモデルに合致する結果も得られた。つまり、自己にとって関与度の高い領域であっても、学校での全体的な能力、裕福さの程度、魅力などの項目では、SEMモデルからの予測とは逆に、自己よりも親友を高く評定していた。これは、SERMモデルの指摘する二次的反映過程に当てはまる結果であり、SERMモデルを実証するものである。これは、心理的に近い他者の自己評価維持をも志向する、そして心理的に近い他者との関係性を維持しようとする心理機制の示すものと言える。このように、高校生の友人選択において、SEM機制だけでなく、SERM機制が併存していることが明らかとなった。こうした心理機制の併存を実証したことの意義は極めて大きい。

また、日本とシンガポールにおいて、いくつかの興味深いSEMおよびSERM傾向の違いも見出された。特に、学校の教科において、SEMモデルに合致する典型的な結果が得られた日本に対し、シンガポールでは、それが明確ではなかった点は、文化的な背景や学校の教科に対する意味づけの違いを示唆している。いずれにせよ、これらの結果は、SEMおよびSERMが高校生の友人関係および学校生活と密接に関連していること、そして教育的な営みに重要な役割を果たしていることを示している。今後は、SERMモデルの欧米圏での汎用性についての検討が期待されるところである。

## 論文審査結果の要旨

対人関係における自己評価維持 (Self-Evaluation Maintenance: SEM) 機制 (Tesser, 1988) は、友人関係にとどまらず、夫婦関係、きょうだい関係にも適用され、実験研究、調査研究いずれにおいても、データが蓄積されてきている。特に、夫婦関係については、新たに拡張 SEM モデル (Beach & Tesser, 1995) が提唱され、その実証研究もなされている。そうした中、SEM モデルの妥当性ととともに、モデルと合致しない研究データも示され、SERM (Self-Evaluation and Relationship Maintenance: SERM) モデル (磯崎, 2012) という新たな修正モデルが提出されている。SERM モデルは、同一個人内に、SEM を志向しつつ、自己と親密な関係にある友人の自己評価維持を考慮し、自己と友人の双方にとって心地よい関係を作り出し、その関係を維持しようとする関係性維持の心理機制が併存すると説明する。具体的には、ある側面で自己評価維持がなされれば、他の側面では、自己評価維持を度外視するかのような心理機制、すなわち、自己にとって関与度が高いことがらでも、友人を高く評価することがあることを指摘している。関係性維持の心理機制は、SEM モデルの言う関与度が低い領域で生起する反映過程とは異なり、関与度が高い領域で生起するため、二次的反映過程と名づけられている。その実証研究は、まだ緒についたばかりであり、データの蓄積が待たれる状況であった。

本研究は、質問紙調査によって、この SERM モデルの実証を試みたものである。参加者は、日本の高校生 416 人とシンガポールの高校生 300 人であった。質問紙は、SERM モデルを検討するために巧みに構成され、高校生にとってさまざまな関心領域の項目から成っていた。データは、SPSS を用いて適切に処理され、以下のような興味深い知見が見出された。第一に、日本およびシンガポールいずれにおいても、フリータイムの活動やクラブ活動などにおいて、関与度の高低と心理的近さとの間に SEM モデルから予測される交互作用が見出され、SEM モデルの基本的な妥当性が確認された。第二に、自己にとって関与度の高い領域であっても、学校での全体的な能力、裕福さの程度、魅力などの項目では、SEM モデルからの予測とは逆に、自己よりも親友を高く評定していた。つまり、二次的反映過程が生起していた。この結果は、高校生において、自己と親友との間で自己評価維持だけを目指すだけでなく、互いの関係性維持を志向した心理機制が併存することを意味しており、SERM モデルの妥当性が明らかとなった。

自己評価を維持しつつ、その関係を維持しようとする心理機制が併存していることは、対人関係の形成と維持が、一方的なものではなく、相互作用のそして力動的なものであることを意味している。本研究は、対人関係における SEM モデルの洞察とその有用性に、関係性維持という心理機制を新たに加えることの重要性、そしてそれを実証した研究として、高く評価できる。学界への貢献も大きく、この分野の研究の進展に貴重な一石を投じている。また、日本およびシンガポールの高校生の間では、いくつかの興味深い違いも見られた。これらの研究結果について、さらに詳細な検討がなされ、今後、アジアの文化圏とは異なる欧米文化圏においても、SERM モデルの実証的検証がなされることを期待したい。

以上、審査委員会全会一致で、本研究成果と今後の研究展開の可能性、学術的価値を高く評価し、博士論文として合格と認めた。